

志那漁港工区発掘調査概要報告書

1986. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

志那漁港工区発掘調査概要報告書

1986. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

はしがき

滋賀県の顔「琵琶湖」をとりまく景観は、近年の開発事業の進展に伴い一変しつつあります。本書は、琵琶湖総合開発事業の一環としておこなわれます湖岸管理用道路志那漁港工区建設に伴う志那湖底遺跡の発掘調査概要報告書です。

志那湖底遺跡は草津市志那町地先の湖底に眠る遺跡で、滋賀県の遺跡のあり方の特色であるといえます。この調査報告書が人間と「琵琶湖」の協調の歴史を考える上での一助となれば幸です。最後に調査に御尽力をいただきました各位に改めて感謝申し上げます。

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

例　　言

- 1 本書は湖岸堤管理用道路志那漁港工区建設事業に伴う志那湖底遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和60年に発掘調査を実施し、同年度に整理したものである。
- 2 本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの委託により滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり実施した。
- 3 本事業の事務局は以下の通りである。
滋賀県教育委員会
　文化財保護課長市原浩、課長補佐中正輝彦、埋蔵文化財係長林 博通、管理係主事山本徳樹
助役滋賀県文化財保護協会
　理事長 南 光雄、事務局長江波弥太郎、埋蔵文化財課長近藤 滋、調査一係主任兼康保明、技師奈良俊哉、総務課長山下 弘、主事松本暢弘、立入裕子。
- 4 本書で使用した方位は磁北方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
- 5 本調査は奈良俊哉が担当し、本書の執筆、編集は奈良と兼康保明が行った。なお、調査では、以下の諸氏の御協力を賜わった。
高田宏司、大柳仁司、前角和夫、多田節子、仏教大学3回生福田京子、滋賀県立短期大学1回生山中 学、矢野憲治、記して御礼申し上げたい。
- 6 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

はしがき

例 言

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査の経過.....	1
第3章 A地区の調査.....	2
第4章 B地区の調査.....	4
第5章 結 語.....	7
(1) 試掘調査のまとめ.....	7
(2) 石垣の調査.....	7
まとめ.....	8

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡位置図（明治25年）
- 図版 2 トレンチ配置図
- 図版 3 土層断面図
- 図版 4 樋門内石垣実測図
- 図版 5 志那漁港
（上）志那漁港空撮
（下）樋門部遠景（北より）
- 図版 6 樋門部空撮
（上）樋門内
（下）樋門内部石垣
- 図版 7 樋門部石垣
- 図版 8 樋門部石垣
（上）樋門部石垣北側I（南より）
（下）樋門部石垣北側II（西より）
- 図版 9 樋門部石垣
（上）樋門部石垣南側I（北より）
（下）樋門部石垣南側II（西より）
- 図版10 樋門部石垣近景
（上）樋門部石垣北側I（南より）
（下）樋門部石垣北側II（南西より）
- 図版11 樋門部
（上）第1トレンチ（北より）
（下）第2トレンチ（北より）
- 図版12 樋門部
（上）第3トレンチ（北より）
（下）第4トレンチ（北より）

- 図版13 潮岸堤部
(上) 第1トレンチ(北より)
(下) 第2トレンチ(南より)
- 図版14 潮岸堤部
(上) 第3トレンチ(西より)
(下) 第4トレンチ(南より)
- 図版15 潮岸堤部石垣
(上)(西より)
(下)(西より)
- 図版16 草津市の湖岸に残る石垣
(上) 下笠工区石垣(西より)
(下) 志那漁港付近石垣(西より)
- 図版17 草津市の湖岸に残る石垣
(上) 蓬海寺北側石垣(北より)
(下) 志那北工区石垣(西より)
- 図版18 草津市の湖岸に残る石垣
(上) 志那北工区石垣近景(南より)
(下) 志那北工区石垣近景(西より)
- 図版19 草津市の湖岸に残る石垣
(上) 志那北工区石垣近景(西より)
(下) 志那北工区石垣近景(西より)
- 図版20 沖島の採石場跡
(上) 近江八幡市沖島
(下) 石採り場跡遠景
- 図版21 沖島の採石場跡
(上) 石採り場跡の現状
(下) 岩盤に残る矢穴
- 図版22 沖島の採石場跡
(上、下) 沖島西岸に残る採石のくず石

第1章 はじめに

草津市の湖辺には、古来より数多くの遺跡が知られている。なかでも、草津市志那町・志那中町地先の湖辺では、残り少なくなった砂浜で、今でも遺物を見かける時がある。昭和7・8年頃には、砂利採取に際して、袈裟摩文銅鐸が出土した。この銅鐸だけではなく、弥生時代中期と思われる遺物も、両町の湖辺より、数多く採取され、志那町・志那中町の湖底は弥生時代中期の志那湖底遺跡として周知されるようになった。しかしながら遺跡の範囲や性格といったものは必ずしも明確なものではなかった。その後、昭和56年度から滋賀県教育委員会によって毎年のように試掘調査が行われ、志那湖底遺跡の範囲もだんだんと明確になってきた。また、弥生時代中期のみならず、縄文時代前期以降各時期の遺物なども検出されることにより、複合した時代の遺構が、志那町・志那中町の沖合いに存在するのではないかと考えられるようになった。

今回調査を行った志那漁港工区は、志那町の南端にあたり、湖南唯一の内湖である平湖の前面部分の旧浜堤上にある。調査区の北側にある志那漁港の前方沖合い50~400mでは、縄文・弥生のほかに土師器や須恵器を含んだ遺物散布地が認められている。また、南側には、縄文時代晩期と思われる遺物包含層が検出されている。さらに南側にある葉山川左岸の七条浦でも、標高83.1~83.2mの地点より、弥生時代前期から中期にかけての良好な資料が出土した七条浦遺跡などがある。また、平湖と付近の水田や、旧航路などの関係上湖岸に沿った地域には、近世以降の石垣や、水門などが残っている。

以上の様に、今回の調査区は近隣した地区に重要な遺物包含層があることや、変貌する湖岸の歴史を考えるうえでも極めて重要な地域にあると言える。

第2章 調査の経過

今回の調査は、水資源開発公団が実施する志那漁港工区湖岸堤管理用道路及び平湖樋門建設に伴う事前発掘調査である。

調査の範囲は、平湖の中央部から琵琶湖に注ぐ河川より、志那漁港に向う志那町地先の

湖岸部約 mの間である。

調査は、昭和60年5月9日より、滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課調査係技師奈良俊哉を担当とし、大柳仁司を調査員に得て実施した。

調査地は、平湖樋門部分と、湖岸堤管理用道路部分とに分けることができる。

平湖樋門部分は、構造物建設にあたって、四方を鋼矢板で囲んでおり、このなかにトレチを設定した。なお、樋門部分に残存していた石垣は、下部施設まで残るものであり、同時に、バルーンを用いた簡易空中測量と、石垣の側面を写真測定した。

湖岸堤管理用道路部分は、あらかじめパイロット道路が建設されており、ここを足場として岸側にトレチを設定して調査を行った。しかし、地下より噴出する水に耐え切れず、パイロット道路側が壊れてしまったトレチも一部あった。

以上のような状況のなかで、調査は昭和60年6月1日をもって終了した。

第3章 A地区の調査

第1トレチ 5m×4.3mのトレチで、深さ約2.5mまで掘削した。

(第1層) 暗灰色砂層。約10cm程の堆積である。プラスチックやビニール、ガラスビンなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 暗茶褐色粘質土層。約12cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。廃棄物は全く含まれていない。

(第3層) 暗黒褐色粘質土層。約50cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。用途不明の棒状の木製品が検出された。

(第4層) 淡灰色粘土層。約88cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第5層) 茶褐色粘土層。約70cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

第2トレチ 5m×4mのトレチで、深さ約3mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約30cm程の堆積である。ビニールなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 茶褐色粘土層。約20cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第3層) 黒褐色粘土層。約80cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。用途不明の木製品が数点検出された。

(第4層) 淡灰色粘土層。約80cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。

(第5層) 黒褐色粘土層。約30cm程の堆積である。多量の腐った植物の根や葉が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第6層) 茶褐色粘土層。約60cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。

第3トレンチ 3.5m×3mのトレンチで、深さは約3.6mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約14cm程の堆積である。廃棄物などは含まれていない。

(第2層) 黒褐色粘土層。約60cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。用途不明の木製品が検出された。

(第3層) 淡灰色粘土層。約36cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第4層) 黒褐色粘土層。約20cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第5層) 青灰色砂層。約1.2m程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。下層部については、危険につき調査不可能である。

(第6層) 青灰色粗砂層。約10cm程掘削したが、多量の地下水が噴出したために、地層の確認のみに終止した。

第4トレンチ 3.7m×3mのトレンチで、深さ約3.3mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約25cm程の堆積である。廃棄物などは含まれていなかった。

(第2層) 黒褐色粘質土層。約50cm程の堆積である。少量の腐った植物の根が含まれている。用途不明の木製品が数点検出された。

(第3層) 淡青灰色粘質土層。約50cm程の堆積である。腐った植物の根や茎が含まれている。

(第4層) 黒灰色粘質土層。約15cm程の堆積である。腐った植物の根が含まれている。

遺物は検出されなかった。

(第5層) 灰色粘質土層。約10cm程の堆積である。腐った植物の根や茎が含まれている。
遺物は検出されなかった。

(第6層) 灰色砂層。約1.8m程の堆積である。腐った植物の根や茎が含まれている。遺物は検出されなかった。

第4章 B地区の調査

第1トレント 5m×4mのトレントで、深さ約3.5mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約100cm程の堆積である。プラスチックなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 灰色粘質土層。約30cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第3層) スクモ層。約40cm程の堆積である。多量の腐った植物の根や貝殻などが含まれている。用途不明の板材が検出された。

(第4層) 灰色粘土層。約50cm程の堆積である。多量の腐った植物の根や貝殻などが含まれている。遺物は検出されなかった。

(第5層) 黒灰色粘質土層。約40cm程の堆積である。少量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第6層) 青灰色砂層。約90cm程の堆積である。土質はしまっている。遺物は検出されなかった。

第2トレント 5m×4mのトレントで、深さ約3.50mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約100cm程の堆積である。ビニールやプラスチックなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 灰色粘質土層。約35cm程の堆積である。腐った植物の根や葉が含まれている。流木が含まれている。

(第3層) スクモ層。約40cm程の堆積である。腐った植物の根や葉、貝殻などが含まれている。

(第4層) 灰色粘質土層。約45cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。土質はしまっている。

(第5層) 黒灰色粘質土層。約40cm程の堆積である。流木が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第6層) 青灰色砂層。約90cm程の堆積である。流木、用途不明の板材が含まれている。遺物は検出されなかった。

第3トレーナー 5m×4mのトレーナーで、深さ約3.20mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約90cm程の堆積である。ビニールやプラスチックなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 淡灰色粘質土層。約40cm程の堆積である。腐った植物の根が含まれている。流木、用途不明の板材が含まれている。

(第3層) スクモ層。約30cm程の堆積である。腐った植物の根や葉、貝殻などが含まれている。

(第4層) 灰色粘質土層。約35cm程の堆積である。腐った植物の根や葉が含まれている。

(第5層) 暗灰色粘質土層。約40cm程の堆積である。腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第6層) 青灰色砂層。約85cm程の堆積である。土質はしまっている。遺物は検出されなかった。

第4トレーナー 5m×4mのトレーナーで、深さ約3.30mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約95cm程の堆積である。ビニールやプラスチックなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 淡灰色粘質土層。約45cm程の堆積である。腐った植物の根や葉や流木が含まれている。

(第3層) スクモ層。約30cm程の堆積である。腐った植物の根や葉が含まれている。用途不明の板材が含まれている。

(第4層) 暗灰色粘質土層。約30cm程の堆積である。多量の腐った貝殻が含まれている。

(第5層) 暗青灰色粘質土層。約40cm程の堆積である。腐った植物の根が含まれている。土質はしまっている。

(第6層) 青灰色砂層。約90cm程の堆積である。用途不明の板材が含まれている。土質

はしまっている。遺物は検出されなかった。

第5トレンチ 4m×4mのトレンチで、深さ約3mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約90cm程の堆積である。ビニールやプラスチックなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 灰色粘性土質。約50cm程の堆積である。粘性は弱い。流木が含まれている。

(第3層) スクモ層。約30cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。流木が含まれている。

(第4層) 暗灰色粘性土質。約30cm程の堆積である。粘性は弱い。多量の腐った植物の根が含まれている。

(第5層) 黒灰色粘性土層。約40cm程の堆積である。粘性は弱い。多量の腐った植物の根が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第6層) 青灰色砂層。約60cm程の堆積である。用途不明の木製品が含まれている。遺物は検出されなかった。

第6トレンチ 4m×4mのトレンチで、深さ約3mまで掘削した。

(第1層) 淡灰色砂層。約90cm程の堆積である。ビニールやプラスチックなどの現代の廃棄物が含まれている。

(第2層) 灰色粘性土層。約30cm程の堆積である。粘性は弱い。多量の腐った植物の根が含まれている。

(第3層) スクモ層。約30cm程の堆積である。多量の腐った植物の根が含まれている。

(第4層) 暗灰色粘性土層。約40cm程の堆積である。粘性は弱い。多量の腐った植物の根や葉が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第5層) 黒灰色粘性土層。約30cm程の堆積である。腐った植物の根や葉が含まれている。遺物は検出されなかった。

(第6層) 青灰色砂層。約80cm程の堆積である。土質はしまっている。遺物は検出されなかった。

第5章 結 語

(1) 試掘調査のまとめ

今回の調査では、遺構はまったく確認されず、遺物も木片が多量に検出されたのみである。また、この木片も加工痕を持つものはなく、木製品といえるものはなかった。

層位的には、現湖底面より20~30cm位までは、現在の廃棄物を含むヘドロや砂層である。それより下では粘土層になるが、この層中からは木片が多量に出土するが、時期を決定できるような遺物は何一つなかった。この粘土層は、色調や粘性の強弱等によって分層が可能で、一部スクモ層も混じっている。スクモ層内には、腐った植物の葉が30~40cm程堆積しているところもあるが、木製品等の遺物は出土しなかった。さらに粘土層の下には砂層が続いているが、この砂層には流木と思われる樹皮のついた木が2、3本検出された。この層もまた、土器や木製品などは含まれていなかった。

以上の調査結果より、本調査区の環境を推定すると、トレンチの最下層で検出された砂層の時期は、諸か浅瀬であり、粘土層の時期になると、浜堤背後に形成された沼状の湿地となったと考えられる。

(2) 石垣の調査

琵琶湖の湖岸沿いには、護岸のために築かれた石垣が数多く残っている。中でも湖西の石垣は、高島郡マキノ町にある海津の石垣や、高島町打下の石垣など規模も大きく著名である。それに対して南湖の東岸（守山市、草津市、大津市）の石垣は、規模も小さく低い石垣が多い。これら石垣は、湖岸堤や漁港、舟溜りなどによって取壟されたり埋められたりしているが、現在もそのまま使用されている所が多い。今回調査を行った草津市志那町の周辺には、蓮海寺（図版17上）をはじめ、付近の民家（図版16下）にも整然とした石垣が残っている。それに対して、湖側の水田の土手に残されている石垣は雑然としたものが多い。これら石垣については、これまであまり注目されることもなく、その年代についても不明な点が多くあった。ただ、石垣の積み方から推察するなら、近世以降の所産であることが判る。

今回、工事によって消滅する石垣の調査を行ったのは、こうした問題点を少しでも解き明かそうと考えたからに他ならない。

石垣の構造 石垣に使用されている石材は主に花崗岩で、加工の著しいものはないが、石の面の大きさをそろえるために加工したものや、石材を割る際の矢穴が残っているものもある。石垣の上部は、調査以前に工事車輛等が入ったためかなり破損しているが、石垣の高さは約110cm程、石材を3～4石程積み上げていたものと推定される。また、軟弱な地盤に築いたためか、石垣の基底部前面には横木が敷かれ補強されている。この横木には、ホゾ孔があけられており、廃材を再利用したものであった。

石の積み方は、基礎にやや大きめの石を山形に据え、その間に石の面が菱形になるように組みこみ、斜め方向に積みあげている。落し積みとよばれる石積みで、近世以降に見られる技法である。

石垣の用途 湖岸に沿い西面する石垣は、波によって水田が削られたり、崩れたりするのを防ぐ波止めと護岸の役割をはたすものである。平湖から流れ出る水路の河口部にのみ石垣がL字状に設けられているのも、河口の護岸のためであろう。なおこの水路の石垣は河口部のみであるが、平湖でも部分的に——特に南半で石積みやその残骸が認められる。ただ、平湖の石材には沖島産と思われる石英斑岩と花崗岩の二種が認められた。

さて、調査した石垣のうち、水路の北側に位置する石垣は、湖岸に面する石垣の石積みが、他の部分の積み方にくらべて乱れている(図版8下)。地元の方の談によると、この部分は波によって徐々に上部から石積みが崩れ、その都度補修を行ったためであると言う。琵琶湖の波とその浸食が、かなり激しいものであることがうかがえる。

波止め、護岸以外に、琵琶湖の増水から水田を守る機能も、あわせて考えなければならない。奥琵琶湖の湖北町延勝寺にある石垣は、そうした目的で明治の中頃に、対岸の葛籠尾崎より石材を運んで築いたものである^①。

ま と め 今回調査した石垣の石材は、当初沖島の石英斑岩^②が石垣など土木用に南湖一帯で用いられていたことからその可能性を考えていたが、石材が花崗岩主体であることから他の石材産地より運ばれたと考えるべきである。志那より津田江湾にのびる湖岸の石垣も、やはり花崗岩が多く用いられている(図版18・19)。花崗岩は、近世以降に対岸の志賀町より比良石として、守山方面に建築材として送り出されている例があり、本地域に運ばれた可能性の高いものである。一方、聞き取り調査によれば、栗東方面より土木用の石材を運んだとの話もあり、詳細は石材鑑定を行っていない現状においては、産地を特定することは難しい。

石垣の構築年代は、遺物等の出土がなかったため決め難いが、石積みの技法よりみて近世を遡るものではない。また湖岸の地形を、明治25年に作製された仮製図でみると、志那町周辺の湖岸一帯はまだ湿地が多く、水田も湖岸線まで迫っているものはない。調査地区は平湖の旧浜堤上に位置しており、石垣は記録されていない(図版1)。同様な地理的環境にある草津市鳥丸崎では、北側の湿地が明治以降に開発されている。軍人田とよばれていた水田がそれにあたり、日露戦争以降の入植である。この半島も湖岸に低い石積みや石垣が残されているが、開発の時期から考えて明治以後のものとみてよいだろう。このように湖岸周辺の土地利用の変遷からみて、調査地点の石垣も、古くとも明治30年代を遡ることはないであろう。湖岸ぎりぎりまで広がる水田の開発は、明治38年の南郷洗堰改修による水位の安定化がはかられて後のことであろう。また、平湖が淡水真珠の養殖場として利用されるようになるのが昭和10年であり、平湖との関連で考えるとそれ以降となる。さらに、石材の湖上運搬が昭和30年代で途絶えることを考慮すれば、その下限もある程度決定できよう。

以上のことから南湖東岸の湖岸の石垣は、その多くは近代の所産であるということが明白であろう。その中で、江戸時代の港やその周辺の集落の中に、どこまで遡れる石垣があるのかさらに実態を把握することが今後に残された課題であろう。また、時期を問わず湖岸で使用される石材の産地決定も重要である。沖島、志賀の採石場と運搬手段をめぐる盛衰の歴史は、産地と消費地の比較によってはじめて可能であるといえよう。

註

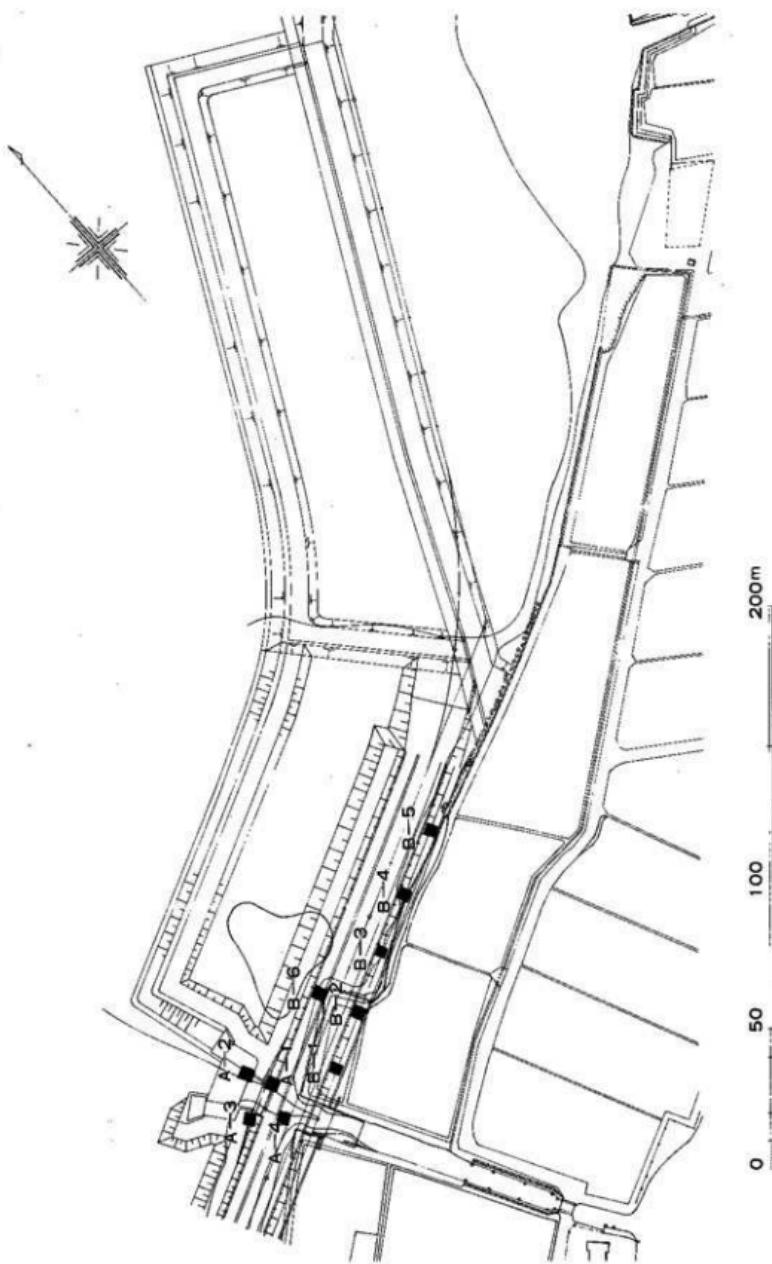
- ① 奈良俊哉「延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985) 13~14、19頁。図版8、13、20、21。
 - ② 「びわ湖の專業漁撈」(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書II 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1979)
- 宮畠巳年生「石材業」 442~448頁
藤田貞一郎「石材」 470~475頁

図 版

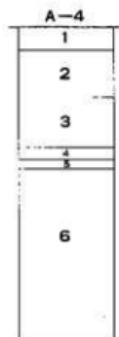
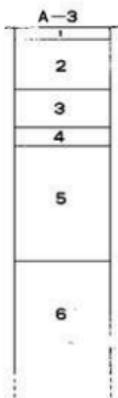
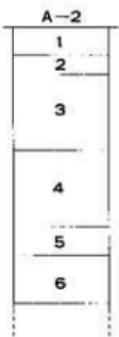
図版1 遺跡位置図(明治二十五年)



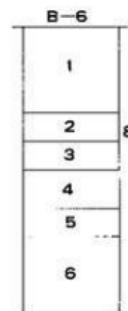
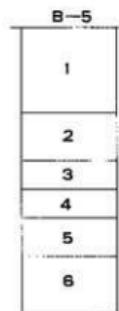
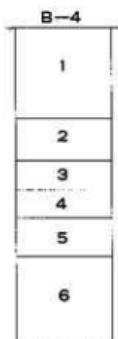
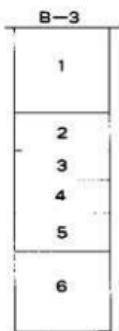
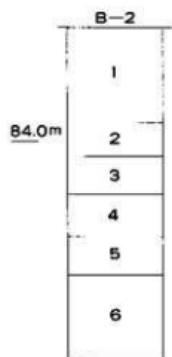
図版2 地形図



34.0m



84.0m

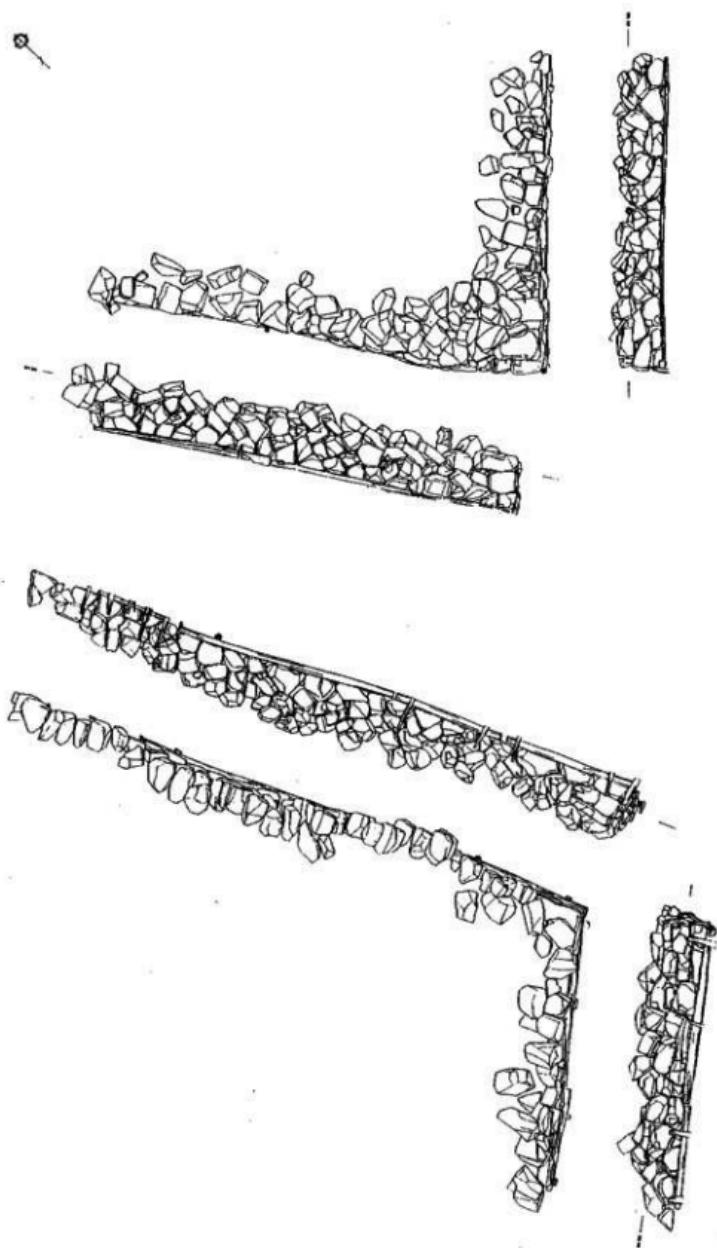


84.0m

0 1 2 3 4 5m

圖版 4 德門內石垣実測図

S = 1 : 100





志那漁港空撮



種門部遠景(北より)



櫛門内



櫛門内部石垣

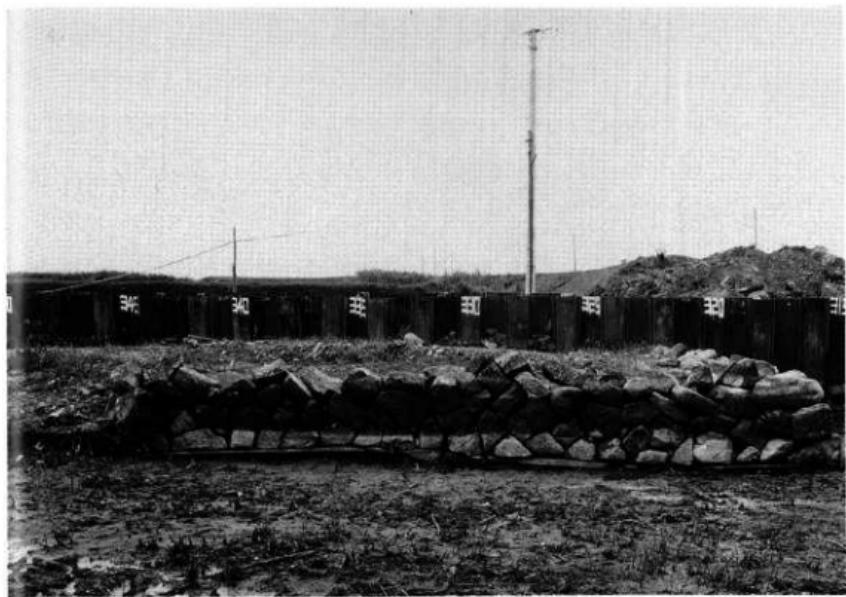




橋門部石垣北側Ⅰ(南より)



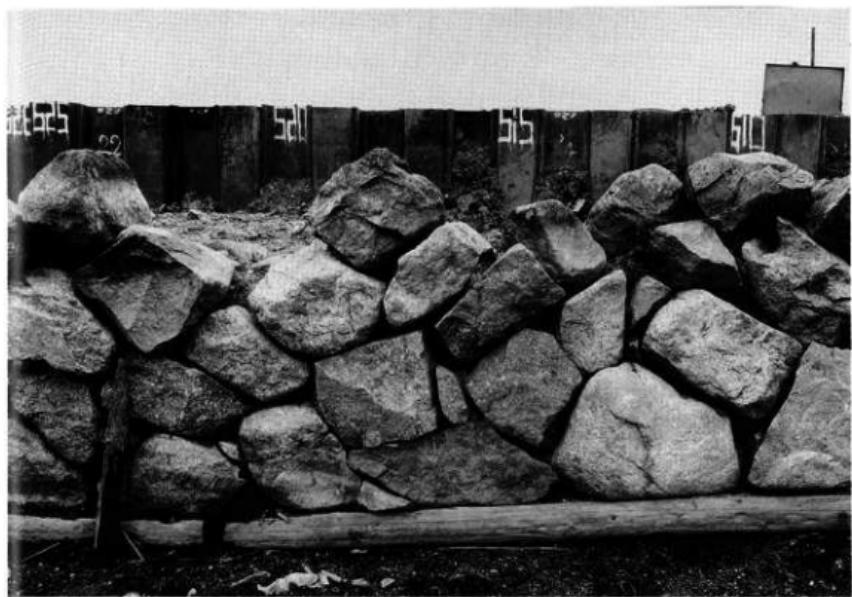
橋門部石垣北側Ⅱ(西より)



横門部石垣南側 I (北より)



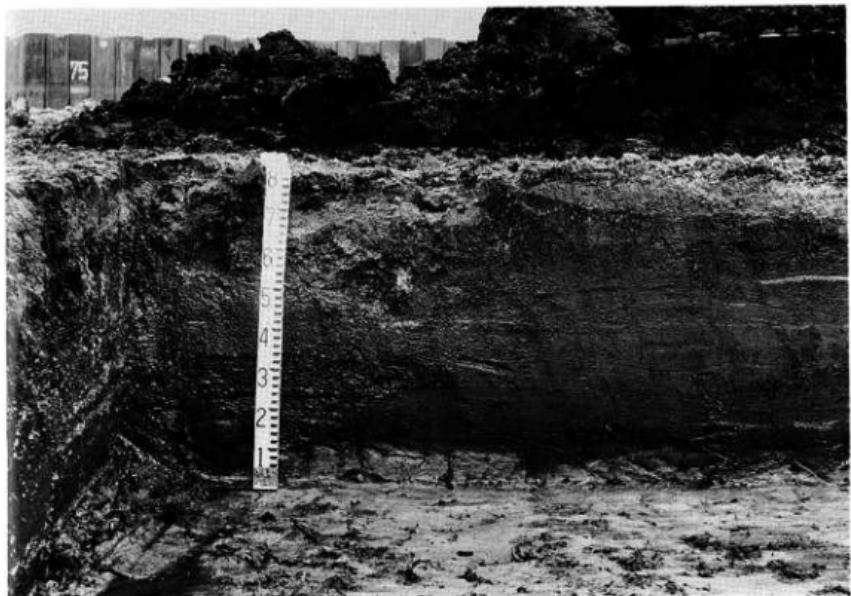
横門部石垣南側II (西より)



樋門部石垣北側 I (南より)



樋門部石垣北側 II (南西より)



第1トレンチ(北より)



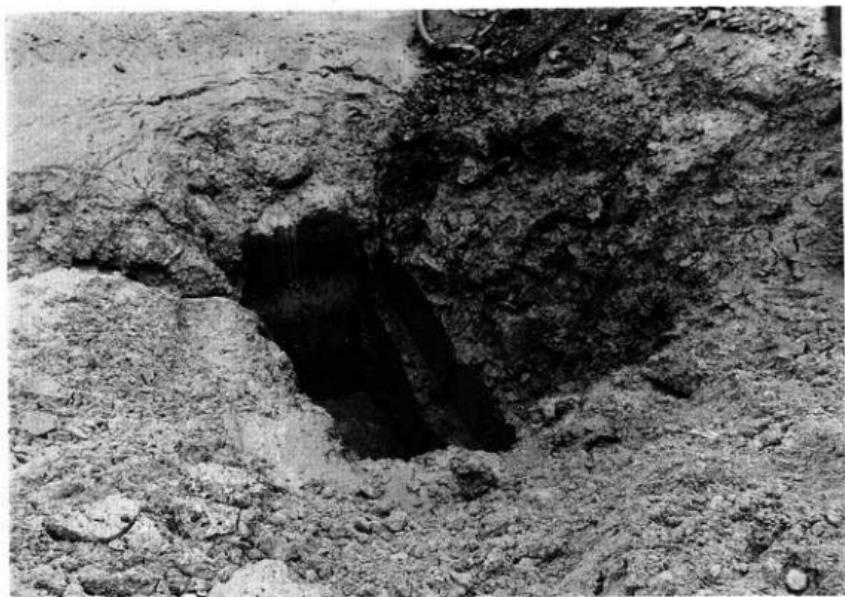
第2トレンチ(北より)



第3 トレンチ(北より)



第4 トレンチ(北より)



第1トレンチ(北より)



第2トレンチ(南より)



第3 トレンチ(西より)



第4 トレンチ(南より)



(西より)



(西より)



下笠工区石垣(西より)



志那漁港付近石垣(西より)



蓮海寺北側石垣(北より)



志那北工区石垣(西より)



志那北工区石垣近景(南より)



志那北工区石垣近景(西より)



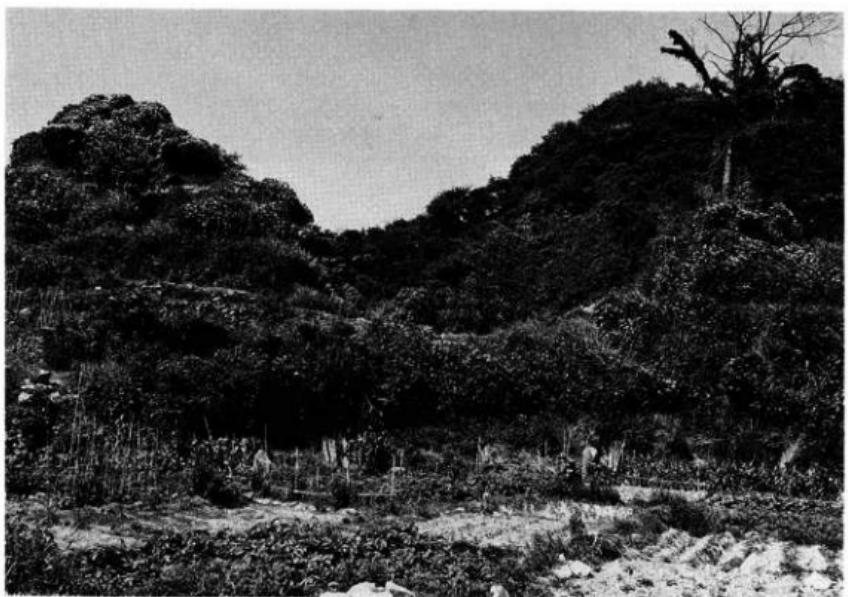
志那北工区石垣近景(西より)



志那北工区石垣近景(西より)



近江八幡市沖島



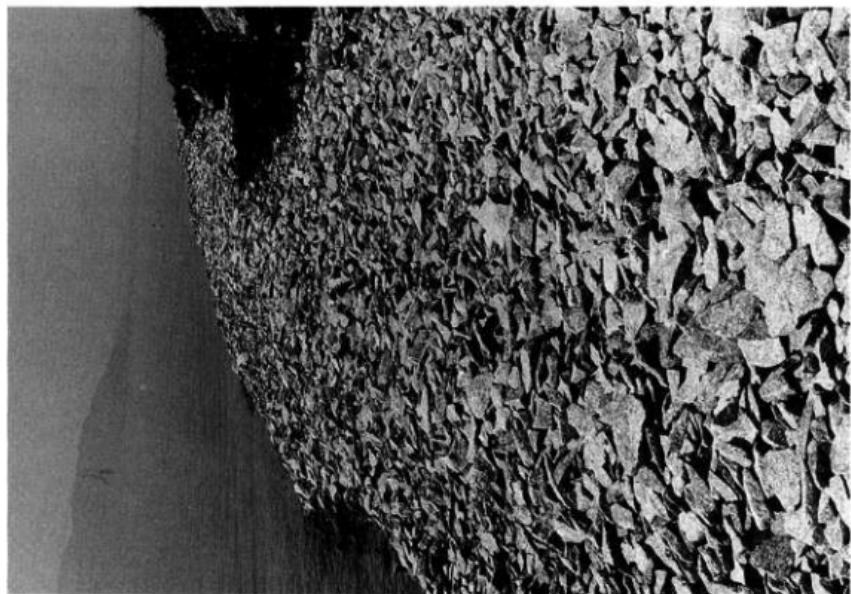
石採り場跡遠景



石採り場跡の現状



岩盤に残る矢穴



沖島西岸に残る採石のくず石(上、下)

志那漁港工区発掘調査概要報告書

発行所 滋賀県教育委員会
（財）滋賀県文化財保護協会
大津市京町四丁目1-1
発行所 昭和61年3月
印刷所 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
